

日本の歴史 44

『江戸日本の転換点： 水田の激増は何をもたらしたか』

武井弘一著 (NHK 出版 NHK ブックス 2015)

本書の請求記号 210.5 Tak

稲垣宏行

江戸時代は一般に、資源を無駄にしない「地域での活動を中心とした循環型の社会」と認識され、環境省の『環境・循環型社会白書』（平成20年版）にも明記されています。しかし、日本近世史を研究する著者はこの見方に反論しています。本書は加賀（現・石川県）の農民・土屋又三郎が著した農書『耕稼春秋』の記述などから、当時の農業の実情を描いています。

江戸時代は日本全国で最も新田開発が進められた時期でした。人間や牛馬の糞尿が肥料として利用され、藁や糶は米を炊く燃料などに使われていました。田畑の周辺には鳥や魚、イノシシなどの生き物が多く生息し、「循環型社会」に相応しい様相でした。しかし、人口が増え水田が増えるにつれ、それは行き詰まりを見せたと著者は述べています。まず、水田の増加に伴って肥料もその分必要になったからです。

肥料は様々な物から生成されました。草から作り出した草肥や、干した鰯を生成した干鰯がそうです。水田が増え旧来の糞尿だけでは追いつかなくなったからです。さらなる収穫高や品質を求める必要性に迫られたことも理由の一つです。そればかりか、村同士で肥料を奪い合い、肥料のために鰯の乱獲を行う事態まで起きました。また、水田の増加は草地を減少させるなど自然環境にも弊害を及ぼしました。

水田には水が欠かせません。常に供給を行える溜め池や河川から水を引く水路が必要です。しかし、目先の利益を追う余り、治水の対策がおろそかになり、その結果、水害が少なからず発生しました。

耕作の効率化には水や肥料だけでなく、牛馬の存在も貢献しています。しかし、全ての農家が牛馬や十分な肥料を揃えられる訳ではありません。貨幣経済の浸透も相まって、地域によっては経済格差まで生まれていたと著者は指摘します。また著者は、この水田増加を20世紀の高度成長

期日本の「日本列島改造」の様だと評しています。あの時代も発展の過程で公害が多発し、資源が枯渇し、環境が破壊されました。現在では格差が広がりつつあります。ただ、循環型社会と評された江戸時代で、既にこのような現象が起こっていたとは皮肉なことです。

本書には我々も知らない水田の歴史的事実も見られます。前述のように、水田周辺には多くの生き物が生息しています。そのため、漁業や狩猟も行われました。獲れた鳥獣や魚は町で売られるだけでなく、武士に売られることもありました。鷹狩り用の鷹の餌として鳥が必要だったからです。5代徳川将軍綱吉の時代は悪名高い「生類憐れみの令」で狩猟や漁業が禁じられていたため、獣害が最も多かった時代という印象が強いですが、実は8代将軍吉宗の時代にもそれに劣らない事例があったのです。吉宗が鷹狩り好きであったため、田畑を荒らす鳥類の駆除が禁じられたのです。鳥類が鷹の餌になるからです。

本書は江戸期農業の負の側面を主題としていますが、これは戦国期が終わり平和になった反動と見ることも出来ます。農民の土屋又三郎が農書を著せたのも、平和によって教育が普及したためです。綱吉の生類憐れみの令も社会にもたらした不利益が強調されますが、著者は、それが病人や子どもなどの弱者が疎外された社会を刷新した点も挙げています。

何事にも正と負の側面があります。江戸期農業の場合、文明の発達という側面も考えられ、ある程度は仕方がなかったと言えない点もあります。しかし「過ぎたるは及ばざるが如し」の諺通り、いつの時代も行き過ぎれば前述のような弊害が起こります。それを少しでも減らすためには、過去の歴史から学ぶ必要があります。そして本書の主眼もそこにあると思います。

いながき ひろゆき (司書・情報サービス課)